文化財の
―博物館・美術館の果たす役割―
保存と修復

開催趣旨

博物館・美術館というと、展覧会などが行われる展示施設というイメージでうけとめられているのではなかろうか。確かに展示施設としての機能は重要であるが、博物館・美術館のもつ文化財保存の拠点としての意義も大きい。

しかし、この点については一般に十分な認識を得ているとはいえないだろう。本シンポジウムでは、博物館・美術館が果たす役割を問い直すとともに、展示・収蔵環境の整備や作品の輸送、さらには収蔵品の修復など、日常的に行われていながら表面的には見えにくい地道な活動を広く一般の方々にも知ってもらうなかで、「文化財の保存と修復」に対する理解を深めることを目的としている。

また、博物館・美術館の抱える多様な現状を鑑み、今後の博物館・美術館のあり方に対して、文化財保存修復学会としての提言を発信することを目指すものである。

主催●文化財保存修復学会
後援●文化庁／京都府教育委員会／京都市
日本文化財科学会／全国大学博物館学講座協議会
京都新聞社／朝日新聞社／産経新聞社／毎日新聞社
読売新聞社／NHK京都放送局

会場●京都テルサホール（京都府民総合交流プラザ）

プログラム　平成11年11月6日（土）

司会進行・京都造形芸術大学　内田　俊秀

10:00〜10:25　開会挨拶・基調講演
◇博物館・美術館の役割
実行委員長・日本大学　三輪　嘉六

10:25〜11:10　特別招待講演
◇保存・修復作業の根底にあるもの
京都国立博物館長　中川　久定

11:10〜11:20　**―休憩―**

座長・東京国立文化財研究所　西浦　忠輝

11:20〜11:50　**◇文化財にも人にも優しい環境をつくる**
東京国立文化財研究所　三浦　定俊

11:50〜12:20　**◇博物館のリスク**
―信頼できる修復・安心できる輸送
東京国立博物館　神庭　信幸

12:20〜13:30　**―昼食―**

座長・別府大学　本田　光子

13:30〜14:00　**◇「文化」を記録する生活文化財**
国立民族学博物館　森田　恒之

14:00〜14:25　**◇歴史を見せる**
―ひろがる地域博物館の役割
群馬県教育委員会　岡部　央

座長・昭和大学　杉山真紀子

14:25〜14:50　**◇民間の文化財集落施設が抱える悩み**
（財）博物館明治村　西尾　雅敏

14:50〜15:05　**―休憩―**

15:05〜16:20　**パネルディスカッション**
コーディネーター・奈良国立文化財研究所　村上　隆

16:20〜16:30　**総括・閉会挨拶**
文化財保存修復学会長・武蔵野美術大学　田辺三郎助

開会挨拶・基調講演

◇博物館・美術館の役割

日本大学　三輪　嘉六

わが国に文化財の保存制度ができて100年余りが経った。そのなかで修復が果たしてきた役割には大きなものがある。それも近年では伝統的な修復技術のみならず、保存科学的な手法もとりいれながら新しい展開が図られている。こうした修復は、これからも文化財を保存継承していくうえで欠かせない直接的な保存方法といえるが、それに対して文化財を文化財にとってよい環境のなかで収蔵、保管しながら保存してゆく間接的な方向づけがある。平成8年の『文化財保護法の改正』で、文化財の公開について従前の規制を緩めた。文化財公開承認施設の設定である。博物館等が展覧会等で国宝や重要文化財を展示するのに的確な保存環境が整った施設であれば、届け出のみで実施できる制度である。規制緩和の一方では、館に保存環境を保持してゆくうえでの新たな責任が課せられたことにもなろう。

現在、博物館・美術館や資料館などの施設は1,200館以上が存在し、『博物館法』ではそれらの施設の機能として調査・研究のほか、資料の収集・保管、公開・活用などをあげている。これらのことに対応しているのが、多くの場合、学芸員の職務に従事している人たちであり、また彼らに求められている課題となっている。しかし、学芸員の仕事はきわめて多岐にわたっているが、博物館資料（文化財）の保存や修復についても対処している場合が大部分である。このこと自体間違いとはいえないまでも、今正しい修復や資料を保存してゆくための環境づくりに不可欠なのは保存科学の研究者や技術者の博物館等への導入である。そして真に博物館等の機能が正しく動いてゆくには、そうした専門家たちと学芸員たちが一体となってはじめてなしとげられると考えられる。保存科学を専門として博物館等に従事している人がほとんど皆無に等しい現状を憂いたい。この解決があってこそ、わが国の文化財保護が大きく進歩するであろう。

特別招待講演

◇保存・修復作業の根底にあるもの

京都国立博物館長　中川　久定

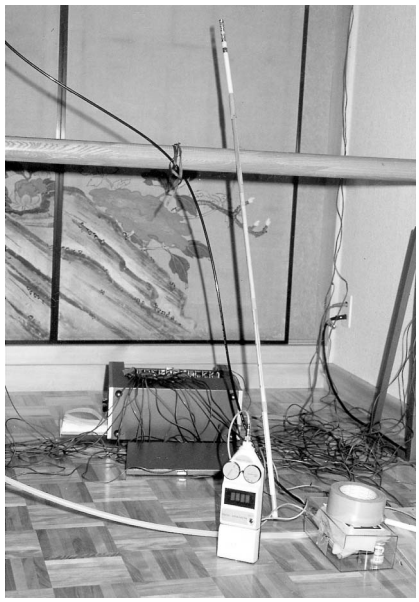
はじめに：非専門家としての私の立場
①美術館・博物館における文化財の展示……美術館・博物館、文化財、「コレクション」
②時間と歴史……時間、文化財とその歴史性、文化財と消滅
③保存・修復作業の根底にあるもの……創造／再生／「保全・修復」、起点としての「そこにあるもの」
消滅への過程における文化財の生
おわりに：日本的保存・修復技術―認識と使命

日本において、昔から実践されてきている「保存・修復」作業の根底にある原則について、文化財の重要性を認識する一人の非専門家日本人として、上記の項目にしたがって、私見を述べさせていただきます。

◇文化財にも人にも優しい環境をつくる

東京国立文化財研究所　三浦　定俊

近年、文化財の保存では、一般によく知られている温度、湿度、光だけでなく、空気汚染が問題になっている。空気汚染といえば、工場や車の排気ガスに起因する大気汚染がすぐに思い浮かぶ。確かに、酸性雨は屋外のブロンズ像や大理石像などを傷めるし染織品なども劣化させるが、多くの博物館・美術館では外からはいってくる大気汚染よりも建物の内装や収納棚、展示ケースなどの材料から発生する揮発性物質等による室内汚染が、今一番の問題になっている。この室内汚染は新築のマンションなどで話題となっている「シックハウス症候群」と同根のものである。新築のマンションでは、建材や接着剤に広く使われているホルムアルデヒドなどの揮発性有機化合物（VOC）が室内に高い濃度で充満し、頭痛や目、のどの痛み、アレルギー症状を引き起こすといわれている。博物館・美術館では、展示ケースの内装材から発生するアルデヒド類や酢酸などが室内汚染の主な原因で、それらの物質は人間の健康に影響があるだけでなく、文化財に用いられている材料を変質させたり、錆びさせたりすることが知られている。またVOCのほかにも、新しいコンクリートから発生する微量のアンモニアも亜麻仁油を変色させたりすることがわかっている。室内汚染は特に新築の施設で問題になるが、既設の施設でも増改築したときや特別展などで新しい展示ケースを使用した場合に問題が生じやすい。特に、換気量の少ない収蔵庫や最近広く利用されている密閉式展示ケースでは、内部のVOC濃度がたいへん高くなっていることがあり、文化財にとっても作業する人間にとっても対策を必要とされている。「文化財にも人にも優しい環境をつくる」ことが、今、文化財公開施設の設計・建設における大きな課題である。



展示室における風速や空気汚染の測定（愛知県岡崎市大樹寺）

◇博物館のリスク－信頼できる修復・安心できる輸送

東京国立博物館　神庭　信幸

はじめに　博物館の文化財は危険と隣り合わせである。展示室で展示されているとき、収蔵庫で保管されているとき、貸し出しのために輸送されているとき、損傷を直すために修復を行うとき、写真やビデオ撮影を行うとき、文化財を綿密に調査するときなど、あらゆる活動のそばに存在している。盗難などの事件、手から滑り落ちて割れてしまうといった事故、水害による冠水といった災害、保存方法の欠陥から生じる損傷や腐食などの劣化現象の危険は、博物館活動と無縁ではない。

保存をおびやかすもの　保存をおびやかす要因には、温湿度や大気汚染などの保存環境、誤った修復処置や繰り返される修復、展示や撮影の照明、梱包方法と輸送中の取扱い、自然災害による被害などが考えられる。

修復は保存に寄与するものであるが、一方、材料の選択や修復の仕方にあやまちがあれば破壊につながる場合もある。また、繰り返し行われる修復により、製作当初の姿が徐々に失われていくことは致し方ないこととはいえ、一種の劣化プロセスである。輸送は文化財に大きな環境的変化を与える。輸送中に振動、衝撃、温度変化などが梱包ケースに伝わるが、内部を覗くことはできないので、実際の輸送状態については到着後に梱包を開いてから推測するしかない。

ドラクロア「ラ・リベルテ」の梱包を解く作業。外側の断熱コンテナーを取り除くと、なかから耐圧容器が現れる。容器のなかには木製の梱包ケースに収納された作品が固定されている

リスクの管理　修復も輸送も、携わる人間の技術が高いレベルにあることは当然である。それを前提としたうえで、信頼できる修復とは、すべての処置が正確に記録され、それが確実に保管され利用できる状態になっているときである。記録は技術情報として、次の修復のときに必ず役に立つ。安心できる輸送とは、輸送前後の文化財の状態を確実に把握し、輸送が行われるたびに梱包ケースに生じた環境的変化などを解析し、輸送の安全性が確認される状態のときである。次回の輸送にその解析結果は必ず生かされる。

◇「文化」を記録する生活文化財

国立民族学博物館　森田　恒之

ある社会が共有する暗黙の約束を「文化」と呼ぶ。私たちが主食とする米飯の炊き方や食べ方も文化である。かつてどこの家にもかまどと釜があった。今日は電気炊飯器が当たり前である。文化にかかわる「もの」が変化したのだ。日常生活の文化を物語る「もの」は消耗品扱いされやすい。耐久消費財という言葉はその例だろう。作るときから廃棄が前提である。作る、使う双方が残すことは考えていない。昔から使いきることは美徳だった。

昔の生活用品を仮に「生活文化財」と呼ぶが、まだ市民権を得た言葉ではない。生活用品の特徴は「希少価値がない」ことだ。どこにでもあるから気やすく廃棄される。だから生活文化財は後世に残りにくい。

博物館の所蔵品には高価、名品、貴重というイメージがともなう。古文書、歴史資料、美術品の多くは最初から永久保管を前提に作られている。出土遺物は何百年を経て今日まで残存したという希少価値を有している。対する生活資料は、使い捨てが前提という意識を抹消しないまま収集したといってもよい。極端な例は一日、一夜の儀礼のために作る祭具の類だろう。例えば七夕飾りである。祭りがすめば、燃やすか川に流すものだ。ものを残す発想はどこにもない。しかし、ものがなければ儀礼の様子は半分も伝わらない。ものの作り方は年とともに少しずつ変化するが、その記録も残らない。年中行事の伝承はできても、記憶に基づくもので物証によるものではない。

私たちは、みかけや機能が同じなら、ものの変化にあまり気を払わない。気がついてみると、私たちの生活のなかでいつセルロイドが塩化ビニルにかわったかも定かではない。

残すために作られたものの延命に、私たちは長い時間を費やしてきたが、捨てるために作られたものの延命をほとんど考えてこなかった。しかし、後者こそが私たちの文化の語り部なのだ。何をどう残すか、そこから考えねばならないのが生活文化財の今である。

祭礼や儀礼の用具は、本来、残すことを予定していない。しかし、博物館は物質文化の記録としてそれを残す義務がある

◇歴史を見せる－ひろがる地域博物館の役割

群馬県教育委員会　岡部　央

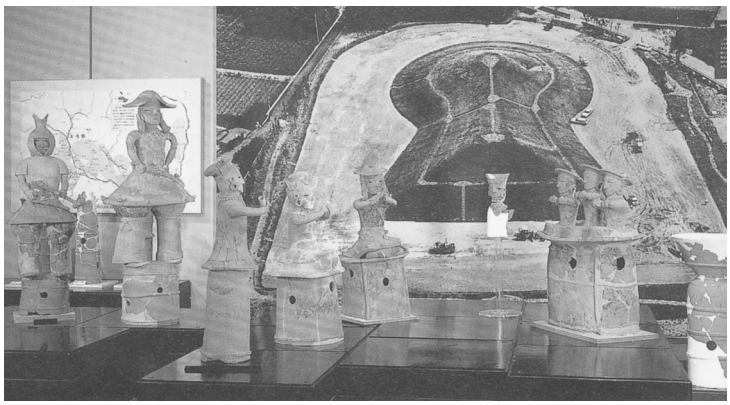
文化財は人類のたいせつな遺産であり、後世に永く伝えていかねばならないが、このことは単に保存するということではなく、的確な活用を図りながら伝えていくということである。文化財の保存活用について、私が携わってきた現場の事例を報告することにする。

群馬県立歴史博物館は、昭和54（1979）年10月、高崎市岩鼻町の県立公園「群馬の森」内に開設された。建築は鉄筋コンクリート造（一部鉄骨造）、地上3階・地下1階、延床面積7,348㎡。常設展示は、群馬県域の歴史・文化を概観できるよう「群馬の土地の生い立ち」「原始」「古代」「中世」「近世」「近現代」の6室で構成、844件1,563点を展示する。企画展示は年5回開催する。収蔵資料63,169点、重要文化財等12件、県指定46件を保管。

当館随一の資料は、館からほど近くにある観音山古墳である。6世紀後半に築造された全長約100mの前方後円墳で、副葬品のなかには、韓国武寧王陵出土の獣帯鏡や中国庫狄廻洛墓出土の金銅水瓶と類似したものがあり、大陸や半島とのつながりを物語っている。石室内部を同寸で復元するとともに埴輪群像を再現展示し、当時の様子を実感としてわかるようにしている。

また、ふるさとの風土と人々の暮らしを伝えるためには、従来の美術工芸品的な資料にとどまらず、「小正月のツクリモノ」や「ワラミノ」のような行事や日常生活に用いられた消耗品的な資料も重要な博物館資料であり、いかに保存し、展示していくかが、大きな課題になっている。

これらの資料には、どのように保存処置が施され、どのような復元作業が行われてきたのか、展示までの状況を紹介する。



観音山古墳の埴輪群。巫女（みこ）・男巫（おかんなぎ）・三人童女（さんにんどうじょ）らが「しのびごと」をすすめている

◇民間の文化財集落施設が抱える悩み

（財）博物館明治村　西尾　雅敏

昭和15年、鹿鳴館破壊を知ったときの東京工業大学教授谷口吉郎博士の慨嘆は次のようなものであった。

「歴史は曲げたり、抹殺することはできない。むしろ、時の流れを凝視することが大切である。そのために、鹿鳴館の建築を保存し、明治時代に生まれた人々が心を合せ、所持品や記録などを持ちよって博物館にしたら、（略）次の時代におくる有意義な贈物となったろうと思うと、惜しい気がしてならない。取り壊された跡に新しく建てられたものは、商工省分室という粗末なバラックであった。これはあまりにもひどい歴史的価値の無視である。」

この嘆きから20年後、建築家谷口博士は明治村構想に向かって周囲の人々を動かし始め、昭和40年3月、博物館明治村は誕生した。戦後の疲弊も癒えて、さらなる地域開発、経済発展が進むなかで、いまだ価値が定まらないがために公的な救いの手が伸びない建築物を破壊から救いとっておこうという活動であった。高度成長時代における町の姿の急激な変貌に抵抗する郷愁からか、あるいは生活にゆとりが生まれてきたことによる行楽地への集中からか、発足から入場者数はうなぎ上りとなり、初年度40万人、4年目にして150万人を数えた。来館者が多ければ資金も潤沢になって、一方では町の再開発が進むため救っておきたい建物もさらに増え、博物館明治村は拡大を続けた。古い建物を抱えた人々の期待と、文化財保存という快い言葉の響きに乗って、この事業でも景気に左右されるのだという惧れを見落として拡大を続けた。今、その大きさが功罪のすべての主因となっているが、民間という形態も悩みを孕む遠因と思われる。

博物館明治村の敷地は池を含まないで100万m²。その広さは皇居と同じである

◇パネルディスカッション

コーディネーター：村上　　隆
パネリスト：三輪　嘉六／三浦　定俊／神庭　信幸
森田　恒之／岡部　　央／西尾　雅敏

多様なる「文化財」の保存と修復。「文化財」概念とは何か。「保存・修復」理念とは何か。パネリストのそれぞれの講演をふまえながら、さらに深い内容にきりこんでみたいと思う。そのなかで、わが国における文化財の保存と修復の抱える現状と問題点が浮き彫りにできるのではなかろうか。そして、特に美術館・博物館に期待する役割を文化財の保存と修復の立場から話し合ってみたい。

このパネルディスカッションにおいて、これから学芸員を目指す人たちにとっても少しでも参考になる提言がもりこめることを期待している。

内田　俊秀（ウチダ　トシヒデ）
京都造形芸術大学教授
昭和46年明治大学文学部史学地理学考古学専攻卒業、昭和51年文化財保存修復国際センター科学理論課程修了、昭和53年国立ローマ中央修復研究所修了。
（財）元興寺文化研究所保存科学研究室研究員、京都芸術短期大学助教授、京都造形芸術大学助教授を経て、平成9年より現職。
共著書に『現代美術館学』（昭和堂、1998）、『鋳物の技術史』（社団法人日本鋳造工学会、1997）、『古代青銅の流通と鋳造』（鶴山堂、1999）。

三輪　嘉六（ミワ　カロク）
日本大学教授
昭和13年岐阜県生まれ。
日本大学史学科卒業。
文化庁主任文化財調査官、東京国立文化財研究所修復技術部長、文化庁美術工芸課長、同文化財鑑査官を経て、平成10年より現職。
著書に『日本馬具大鑑Ⅰ～Ⅳ巻』（編著、吉川弘文館）、『家形はにわ－日本の美術－』（至文堂）など。

中川　久定（ナカガワ ヒサヤス）
京都国立博物館長。日本学士院会員。京都大学名誉教授
昭和29年京都大学文学部文学科卒業、京都大学大学院文学研究科フランス文学専攻博士課程中退（昭和51年文学博士）。
名古屋大学教養部助教授、京都大学文学部助教授、同教授、パリ第7大学客員教授、パリ国立東洋言語文化研究所客員教授、京都大学文学部長、近畿大学文芸学部教授、パリ高等師範学校客員教授、平成9年4月より現職。
日本フランス語フランス文学会副会長。
専門はフランス文学・思想史、比較文化史。
昭和42年日本フランス語フランス文学会辰野賞、昭和60年フランス共和国パルム・アカデミック勲章、平成5年京都新聞文化賞受賞。
著書に（仏文）Denis Diderot, Essai sur S n que（竹内書店、昭和43年）、『自伝の文学』（岩波書店、昭和54年）、『ディドロの「セネカ論」』（岩波書店、昭和55年）、『甦るルソー』（岩波書店、昭和58年）、『ディドロ』（講談社、昭和60年）、『ディドロの＜現代性＞』（河合文化教育研究所、昭和61年）、（仏文）Des Lumi res et du comparatisme, Paris, Presses Universitaires de France, 1992（平成4年）、『啓蒙の世紀の光のもとで』（岩波書店、平成6年）。その他、和文編著3冊、仏文編著3冊、和文論文約250篇、仏・英文論文約100篇、翻訳8篇。

西浦　忠輝（ニシウラ　タダテル）
東京国立文化財研究所国際文化財保存修復協力センター環境解析研究指導室長
昭和45年東京農工大学農学部林産学科卒業。
昭和50年東京国立文化財研究所入所。修復技術部主任研究官、アジア文化財保存研究室長、国際文化財保存修復協力室長を経て、平成7年より現職。
文化財保存修復学会運営委員。
専門は保存科学。現在は文化財保存国際協力事業を担当。
著書に『美術工芸品の保存と保管』（共著、フジテクノシステム、1994）、『文化遺産の保存と環境』（共著、朝倉書店、1995）、『アジア・知の再発見－文化財の保存修復と国際協力』（共著、クバプロ、1996）など。その他研究論文多数。

三浦　定俊（ミウラ　サダトシ）
東京国立文化財研究所保存科学部長
昭和46年東京大学工学部卒業、昭和48年東京芸術大学大学院保存科学専攻修了。保存科学部物理研究室長を経て、平成5年より現職。東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻教授を併任。
平成5年よりICCROM（文化財保存修復研究国際センター）の理事を、平成9年よりIIC（国際文化財保存学会）理事。
専門は文化財に関する物理計測。特に文化財の保存環境やX線、赤外線等の画像の応用に関する研究。
共著書に『光学的方法による古美術品の研究（増補版）』（吉川弘文館、1984）、『平等院大観（第3巻絵画編）』（岩波書店、1992）など。

神庭　信幸（カンバ　ノブユキ）
東京国立博物館学芸部保存修復管理官。博士（美術）。
昭和54年東京芸術大学大学院美術研究課修士課程修了。
国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授を経て、平成10年4月より現職。
専門は保存科学。特に文化財の保存環境、修復技術ならびに絵画の技術に関心をもつ。
主な著書は『科学の目で見る文化財』（アグネ技術センター、1993）、『高橋由一油画の研究－明治前期油画基礎資料集成－』（歌田真介編、中央公論美術出版、1994）、『文化財の輸送、展示、収蔵のための小空間における湿度・水分の変化に関する保存科学的研究』（学位論文、1997）、『京都大学所蔵「マリア十五玄義図」の調査』（国立歴史民俗博物館研究報告76集、1997）、『色彩から歴史を読む』（ダイヤモンド社、1999）など。

本田　光子（ホンダ　ミツコ）
別府大学文学部文化財学科教授
昭和50年明治大学文学部史学地理学科卒業、東京芸術大学大学院美術研究科保存科学専攻修士課程修了。
福岡市埋蔵文化財センターを経て、平成8年より現職。
専門は埋蔵文化財の保存科学。特に弥生、古墳時代の顔料、金属器に興味をもつ。
著書に「湖北省刑州地区出土漆器の保存科学的調査」『福

岡からアジアへ』（西日本新聞社、1997）。

森田　恒之（モリタ　ツネユキ）
国立民族学博物館教授
昭和36年東京芸術大学芸術学科卒業、昭和38年同大専攻科保存修復技術専攻修了。
埼玉県博物館、東京都美術館学芸員、国立民族学博物館助教授を経て、平成3年より現職。
専門は博物館環境。特に空中浮遊物に関心がある。現在はミストタイプの防虫剤の浮遊挙動に関心をもつ。あわせて産業記念物の保存に手を出している。

岡部　　央（オカベ　ヒロシ）
群馬県教育委員会文化財保護課課長補佐
昭和48年東京芸術大学美術学部彫刻科卒業、昭和50年東京芸術大学大学院美術研究科保存技術専攻修士課程修了。
群馬県立歴史博物館学芸課長を経て、平成11年4月より現職。中央大学文学部非常勤講師。専門は文化財保存技術。特に仏像彫刻。現在は博物館活動、文化財の保存活用に興味をもつ。
著書に群馬県立歴史博物館企画展「謎の大寺飛鳥川原寺-白鳳の仏」1996年、「高崎市延養寺の円空仏天神像について」群馬県立歴史博物館紀要第18号1997年、「天平の造形を伝える木心乾漆造菩薩形立像」上州文化第73号1998年。

杉山真紀子（スギヤマ　マキコ）
昭和大学講師
東京芸術大学大学院博士課程保存科学専攻修了。平成2年学位論文「有機合成殺虫剤の美術材料への影響」によって学術博士号授与。
カナダ国立文化財研究所カナダ政府招聘研究員、（財）文化財虫害研究所研究員を経て、現在は平成5年より引き続いての昭和大学講師。
文化財保存修復学会運営委員。家屋害虫学会役員。
専門は美術館・博物館・図書館の防虫対策指導、収蔵庫設計。
著書に『博物館の防虫対策手引き』（翻訳、淡交社出版、1991）、『建築の七燈』（翻訳、鹿島出版会、1997）、『窒素ガスによる展示ケース内での新しい防虫殺虫装置』（論文、家屋害虫、1995）など多数。

西尾　雅敏（ニシオ　マサトシ）
博物館明治村建造物担当部長
昭和44年3月東京工業大学理工学部建築学科卒業。
昭和44年4月名古屋鉄道株式会社入社以来、博物館明治村の業務に従事。平成5年より現職。
専門は建造物調査、移築、保存。現在は文化財保存の啓蒙に興味をもつ。
鉄道施設協会論文賞、日本博物館協会永年勤続表彰、東海地区博物館連絡協議会功労賞受賞受賞。

村上　　隆（ムラカミ　リュウ）
奈良国立文化財研究所主任研究官
昭和53年京都大学工学部卒業、昭和55年同大学院工学研究科修士課程修了、昭和60年東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了、昭和63年同博士課程修了、学術博士。
日本学術振興会特別研究員、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部、埋蔵文化財センター研究指導部を経て、飛鳥・藤原宮跡発掘調査部。文化財保存修復学会運営委員・会誌編集委員。日本文化財科学会評議員・幹事。京都造形芸術大学非常勤講師（「博物館実習」担当）。
専門は文化財保存科学。特に古代材料技法史、金工を中心に材料科学の手法を用いて材料と製作技法の歴史的変遷を追求している。また、文化財の環境や防災にも関心を寄せている。
『色彩から歴史を読む』（共編、ダイヤモンド社）、『博物館の環境管理』（共訳、雄山閣）、『文化財は守れるのか』（文化財保存修復学会編）、『Japanese Traditional Alloys』（Butterworth）、「古代金工における金属接合技術」（『文化財論叢Ⅱ』）、『ミクロな眼で探るわが国金工技術の世界』（佛教藝術）、『文化財不可視情報の可視化－見えないものを見る視座－』（クバプロ）。

田辺三郎助（タナベ　サブロウスケ）
武蔵野美術大学教授。町田市立博物館長（非常勤）
昭和29年東京大学文学部美術史学科卒業、昭和31年同大学院人文科学研究科修士課程修了。
文化庁文化財保護部美術工芸課主任文化財調査官、東京国立文化財研究所修復技術部長、国立歴史民俗博物館情報資料研究部長（教授）、東京国立博物館資料部長、文化庁文化財保護部文化財鑑査官を経て、昭和64年より現職。
文化財保護審議会第一専門調査会長。
専門は東洋美術史（彫刻）、特に仏像、仮面類。
著書に、「鎌倉彫刻の特質とその展開」（『国華』1000号、1977）、「古代の御仏について」（『国立歴史民俗博物館研究報告』3号、1984）、『行道面と仰子頭』（至文堂、日本の美術185、1981）、『能面』（小学館ブックオブブックス、1981）、『日本の面』（毎日新聞社、1987）、「東大寺南大門の金剛力士像について」（『三浦古文化』50号、1992）、「晩唐五代の青銅仏群について」（『大和文華』94号、1995）。

●文化財保存修復学会の沿革●

文化財保存修復学会（旧・古文化財科学研究会）の活動は、昭和8年に滝精一博士の提唱によって発足した「古美術保存協議会」に始まります。戦後にいたって、「古文化財之科学」（柴田雄次編集）を創刊し、昭和50年には会の名称を「古文化財科学研究会」と改め、文化財に関する幅広い研究活動を続けてきました。しかも近年、文化財の科学的研究が盛んになるにしたがい、この分野における草分けともいうべき本会に課せられた責任は、ますます重みを加えつつあります。そうした要求に対応するため、本会は平成7年に「文化財保存修復学会」として新たなスタートを切りました。

本会の特長として、物理、化学、生物など自然科学諸分野の専門研究者はもちろん、考古学・建築史学・美術史学など人文科学部門の研究者、文化財保存関係機関の専門家・技術者・博物館や美術館の学芸員、その他文化財の科学的研究に関心をもつ多くの分野の方に参加いただいています。（「入会のしおり」より）

●文化財保存修復学会公開シンポジウム実行委員会●

委員長：三輪　嘉六
副委員長：村上　　隆
委員：西浦　忠輝
本田　光子
杉山真紀子
内田　俊秀

刊行案内
『文化財の保存と修復ー何をどう残すのか？』
ISBN4-906347-92-4　1999年11月6日 第1版発行
B5変形判 カラー8頁、モノクロ108頁　本体価格1,400円

何をどう残してきたか 文化財とその保存修復
日本大学 三輪　嘉六

天平文化を今に伝える 正倉院宝物の保存修復
宮内庁正倉院事務所 成瀬　正和

現代に生きる伝統技術 絹絵の修復
岡墨光堂 岡　岩太郎

古代へのロマン 藤ノ木古墳出土遺物の保存処理
奈良国立文化財研究所 肥塚　隆保

飛鳥の名画を永遠に 国宝高松塚古墳壁画の保存修復
東京国立文化財研究所 増田　勝彦

岩のみほとけの心を現代に 国宝臼杵石仏の保存修復
東京国立文化財研究所 西浦　忠輝

阪神・淡路大震災からの復興 旧神戸居留地十五番館の修復
兵庫県教育委員会 村上　裕道

＊本書は、平成11年2月7日に行われたシンポジウム「文化財の保存と修復ー何をどう残すのか？」をまとめたものです。

問い合わせ先●（株）クバプロ内「文化財の保存と修復」事務局
〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-6-5
TH第4ビル4F
TEL 03-3238-1689 FAX 03-3238-1837
E-mail：kubapro@mtb.biglobe.ne.jp